海と墓
－瀬戸内と南島を例に－

(財)元興寺文化財研究所　角南聡一郎

1．はじめに

現在では、人が死亡すると墓に埋葬することが当たり前のように考えられている。しかし、歴史的にみれば、すべての人を埋葬するようになったのは、それほど古くにまでは遡らない。最も古い遺体処理方法として、遺棄葬、風葬や洞窟葬が想定される。しかし、こうした葬法の痕跡は考古学的資料としては見出しにくい。発掘調査で発見される墓の数が当時の人口と比べて少ないことや、平安時代に描かれた『餓鬼草紙』には、墳墓に埋葬される者と遺棄される者の両者が描かれていることなどから、墓へと埋葬されない人々が相当数いたことが考えられる。

このような問題意識を前提として、本稿では万葉集の挽歌にあらわれた海と死者の関係を手掛かりとして、瀬戸内海や南島の海浜墓地の歴史的意義を考察することを目的とする。

まず、海浜墓地の状況を考古・民俗資料をとりあげ概観する。続いて、海浜墓地成立の歴史的背景を舟葬とその他界観をキーワードに検討する。以上のことから、海と墓の関係から見出される原初的埋葬の痕跡への私見を述べてみたい。

2．万葉集の挽歌にあらわれた葬送と他界観

そもそも挽歌とは、「挽く歌」、古代中国の葬礼において、柩を挽くときに歌われた歌の意であり、それを万葉集では拡大解釈して、一般的な死に関する歌の意として使用している（及川 2003:210-211)。万葉集における他界観は、山中他界観が中心であるとされる。確かに日本は陸上の国土にしめる山地面積が七割近くであるが、四方を海に囲まれている島国であることからすれば、いささか違和感がある。

挽歌のうち、瀬戸内の島々の行旅死人を題材としたとされるものがある。それらの島とは、狭岑島（現在の香川県坂出市沙弥島(しゃみじま)）と、岡山県笠岡市神島(こうのしま)である。いずれも現在は島ではなく、四国と本州の地続きとなっている。沙弥島は塩飽諸島の島であったが、昭和42年（1967）に番の州工業地帯の埋め立て造成により地続きとなった。神島は笠岡諸島に属していたが、昭和41年（1966）からの笠岡湾干拓事業により陸続きとなった。このため歌に詠まれた当時とは景観が著しく変化していることを考慮しなければならない。

「名ぐはし　狭岑の島の　荒磯面に　廬りて見れば　浪の音の　繁き浜辺を　敷妙の　枕にして　荒床に　より臥す君が　家知らば　行きても告げむ」『万葉集』二（〇二二〇）

「玉鉾の　道行く人は　あしひきの　山行き野行き　にはたづに　川行き渡り　鯨魚取り　海道に出てて　畏きや　神の渡りは吹く風も　和には吹かず　立つ浪も　おほには立たず　とゐ浪の　立ち塞ぐ道を　誰が心　いたはしとかも　直渡りけむ　直渡りけむ」『万葉集』一三（三三三五）

狭岑島の石中の死人とは、いわゆる洞窟葬かとも思われるが、歌の内容からは、やはり、行路死人である。神島の浜の屍も風葬ではなく行旅死人としてうたわれている。事実は何であれ、異郷を旅する者の目には、行旅死人とうつるのである。海上の危道に身をさらす旅人が、常世波の打ち寄せるところに屍を発見して怖れおののき、心をこめて慰霊の歌を手向けた（櫻井 1995:257)、との解釈が一

図1　海上他界の分布（大林 1977）

般的である。この指摘のように、実際には島で洞窟葬がおこなわれていた可能性は否定できないであろう。「葬る」ということばは、放ち棄てると同根語であり、山上や海彼への死体放棄であったのである（櫻井 1995:256）から、遺棄葬と洞窟葬の区別を明確にすることには、困難が伴ったことは想像に難くない。

また、葬礼の棺船について詠まれた歌もある。

「奥つ国　領く君が　染屋形　黄染の屋形　神の戸渡る」『万葉集』一六（三八八八）

沖つ国（冥界）を支配する事になった君（の霊魂）が、黄色に塗った屋形船に乗って、神となって冥界の門を渡ることよ、との意を詠んだ歌である。「黄染め屋形船」は、葬礼の棺船のことを指しているとされる。

葬送と船や海とは深く関係するといわれている。民俗学的に、入棺を「御船入」、霊棺を置く所を「浜床」、精進落を海辺で行い「浜おり」というのも水葬と関連があるとされる（中山 1962:63）。

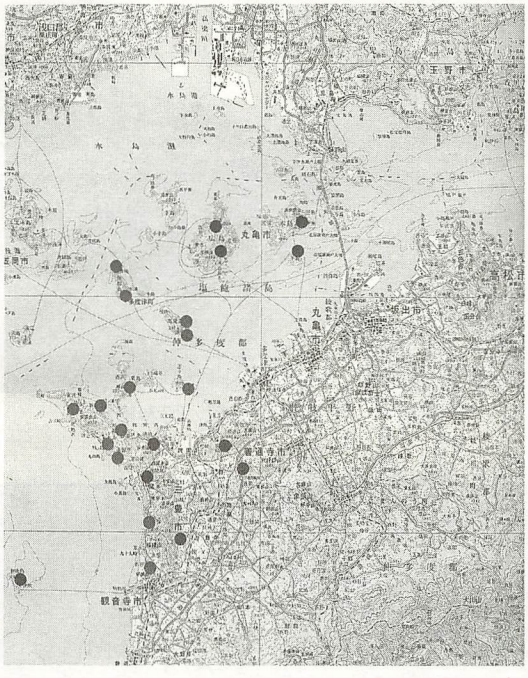
万葉集の挽歌の中には、死者の行方を詠じたもの、死者葬場についしてよんだもの、死者について連想しえる自然現象や物などについては94例があり、うち海浜、島に関する例は23例であるとされる（堀 1953:38-39）。このような海と関係する他界観を、山中他界観に対して海上他界観といい、日本をはじめとして世界各地に分布が認められる（大林 1977、図1）。

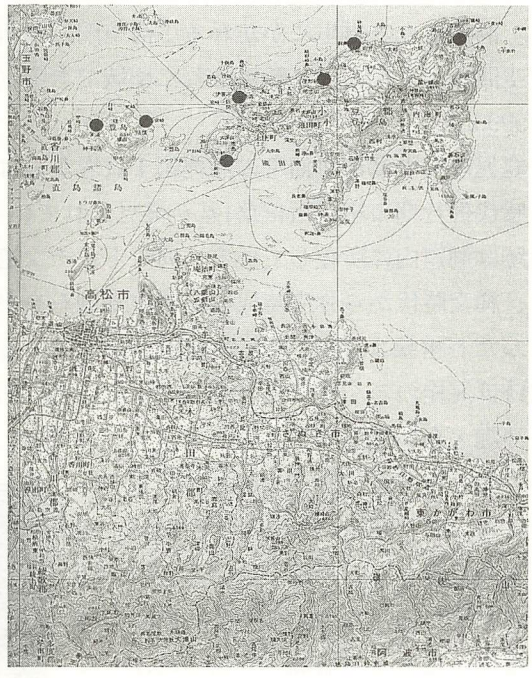
3．海浜墓地の様相

では実際の海浜墓地はどのような特徴があるのだろうか。ここでは、出土考古資料、伝世民俗資料を手掛かりとして、瀬戸内と南島の状況を概観しておきたい。この二つを例示する理由として、前述したような資料の中から遺棄葬や洞窟葬の痕跡を見出すことができるからである。

3-1　瀬戸内の両墓制

瀬戸内海島嶼部では、海に面した場所で墓地に遭遇することがしばしばある。特に、香川県では東西の島々や海岸部に両墓制が顕著に認められた（図2、写真1～3）。一般的にこれらの地方では埋め墓は海辺の波打ちぎわにあり、内陸部では山麓地帯の山の斜面にある（武田 1971:182-183）。西讃地方





凡例
● 現在も両墓制が行われている墓地、または墓地で遺構を見る事ができる。
● 記録等で両墓制が行われたと書かれている場所。現在では遺構もみる事が出来ない。

図２　香川県における両墓制の分布（稲田 2010）

写真１　土庄町の埋め墓（武田 1971）

写真２　佐柳島の埋め墓（武田 1971）

で両墓制は、イヤダニマイリという習俗と関係が深いとされる。イヤダニマイリとは、弥谷山にある四国霊場第七十一番札所真言宗善通寺派剣五山弥谷寺千手院（香川県三豊市）へ遺髪・爪・着物・位牌などを納めたり、霊を背負って参ったりする習俗のことである（多田2004:41)。また、合わせて偶数人で死者霊を歩いて山に送るものである。離島の人々は、イヤダニマイリの際には、港までは船で行き、港からは歩いて弥谷寺に参ったという。

3-2　南島の洞窟葬

奄美における漁猟生活と狩猟生活時代の葬制は風葬であった。葬法は死者の屍を海浜に運んで自然に曝していた。やがて農耕生活時代となり、太陽崇拝思想は生活の場に根を張った。太陽の恵みにより植物が成育する事実が、太陽を神聖視する結果となった。このころには死体を大木の下や洞窟の中に入れる葬法がおこなわれるようになった（徳富 1979:184-185、写真4)。

沖縄では洞窟はしばしば聖域として信仰されている。洞窟は死と再生にかかわる生活空間、墓所、再生空間として最大限に活用された聖域である（外間 1999:38）。

鹿児島県大島郡伊仙町の面縄第１貝塚からは、弥生時代併行期の箱式石棺墓1基が発見されているが、遺跡は洞窟内に所在している。同町トマチン遺跡では、縄文時代から弥生時代の板状の珊瑚石を平積みにした石棺墓より4体の人骨が発見されている。同遺跡は海岸のごく近くに立地している（新里 2011）。

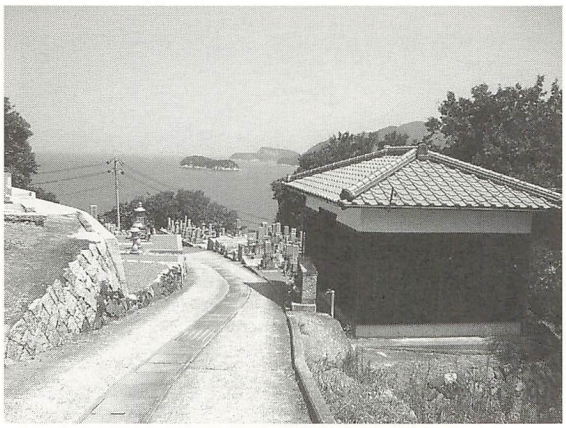


写真３　小豆島の墓地（筆者撮影）

沖縄・奄美で風葬が一般的であったことは、死者をもっとも身近に感じることができるものであった。ゆえに南島では生きている人々の世界からそう遠くないところに死者の世界があると考えされていた。沖縄では島をとりまく珊瑚の外に出ればもはや他界と考えられていたという（谷川 1983:43-44）。

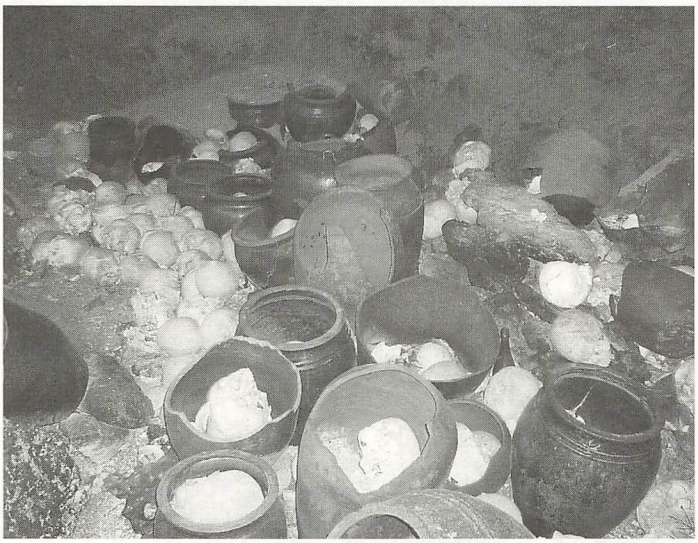


写真４　徳之島の洞窟葬（筆者撮影）

『古事記』における黄泉国説話の成立の問題を検討した、台湾の文学者・鄭家瑜によれば、「黄泉国」と洞窟の関係として次の三つがあげられるという。（一）古代、洞窟は葬送の場として頻繁に利用されていた。（二）『出雲国風土記』の「黄泉之坂・黄泉之穴」のように、洞窟が一つの他界とみなされ信仰されていた。（三）神話における「黄泉国」の様相は洞窟に類似した点が多い（鄭2007:125）。洞窟は「あの世」と「この世」の境として見なされ、「あの世」への入り口として信仰されていたと想定できる。つまり、洞窟自体は一つの幽冥の世界であり、他界であった。『古事記』で「闇岩屋」と呼ばれるのは、その暗さを語るのみならず、暗い洞窟が持つ想像的な死の世界を暗示していた（鄭2007:128）。洞窟葬は海浜に限られるものではないが、島では海浜に多くの洞窟が存在ししており、洞窟と他界そして海とが古くから密接に関係していたことが考えられる。

４．日本における舟葬とその背景

前述した舟や舟形の棺に遺体を乗せて葬送をおこなう舟葬について、考古資料を中心に最新の動向をみておきたい[1]。

近年、千葉県館山市大寺山洞窟遺跡で、国内ではじめて古墳時代の舟葬が確認された。舟葬は、古墳時代に丸木舟を棺に用いた葬送で、棺は埋葬されず、風葬のかたちで執り行われていたとされる。前述したように洞窟は死後の世界や異世界への入り口と見なされ、ここで遺骸と副葬品を舟に乗せる葬送が執り行われたと考えられる（岡本 2006、図3）。

また、名古屋市北区の平手町遺跡の方形周溝墓から、弥生時代中期後半に遡る遺存状況の良好な丸

木舟形木棺が発掘され、従来は弥生後期中葉を確実な年代的上限としてきた丸木舟形木棺の使用時期が遡ることとなった。木棺には蓋と人骨の一部が遺存していた（辰巳 2009）。

民族学者・大林太良によれば、舟葬の分布は次のような広がりであると考えられる。以下、長文となるが引用しておきたい。

舟葬はポリネシアでは、サモア、ニウエ、フィジー、ニュージーランド、チャタムの諸島、メラネシアではセント・ジョージア海峡、ニューブリテン島のガゼル半島東岸、ブカ、ブーゲンヴィル島海岸、カニエトにそれぞれ分布している。なかでも注目すべきことは、サヴェジ島、サモア諸島、ミクロネシアのいくつかの島では、死体を小舟のなかに納め、夕方日の沈む西方の海に向かって流したことであった。ここでは、舟葬と太陽信仰の結びつきが明瞭に現れている。また本式の舟葬でなく、舟棺を用いる場合でも、ミクロネシアのクサエ島、メラネシアのニューアイルランド島、アムブリム島では複葬と結びついている。そして、舟葬こそ行わないが、海上他界の観念と複葬とが結びついてみられるのは、メラネシアのマヌス島やオワ・ラハ島である。ことにオワ・ラハ島では、埋められた霊魂は、太陽によって地下からおびき出されて、海上の死者の島へと旅立つのである。東南アジアで舟または舟棺に死者を葬るのは、ニコバル諸島民、ニアス、スマトラのバタク族、スラウェシ、チモールなどいくつか例があり、また舟型の棺は三世紀の四川省や中国南部のミャオ族やアッサムのロータ・ナガ族のような山地の住民のところまでひろがっている（大林 1977:241-242、図4）。

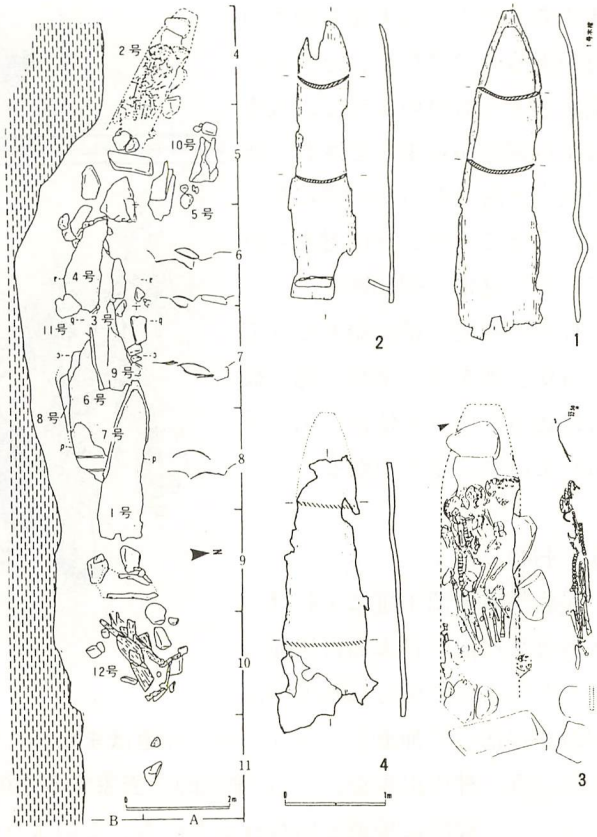


図3　大寺山第1号洞舟葬墓（岡本 2000）

図4　世界各地における舟葬遺構の分布（磯部 1989）

北京では墓で船を焼くという習俗がかつて存在した。詳細は以下のようである。死後六十日目に橋や船の模型を焼いて、死者が無地に三途の川を渡るように祈り、ご馳走を供えて祭祀を行う。紙細工の船には先頭も水先案内人も揃っている。この行事が終わると、重用な儀式はすっかり終わることになる（内田編 1964:104、図5）。葬送ではないが、海に送りだすために舟を焼くという行事は台湾にも認められる。台湾南西部沿海地区の「王船焼き」は「王船祭り」とも呼ばれる行事の一つである。かつては疫病を海に送り出すための儀式であったが、現在は福を祈り求める儀式へと変容している。

また愛媛県の宇和島では、村に死者が出ると、大きな船がお迎えに来ているという。宇和島は海岸

部であるから、海上をお迎えの船が来るのではなく、どうやら空から来るもののようで、大きな船が冥界から来るとされ、空の彼方と海の彼方が一緒になっているところのように考えられている（立平 1996:68）。

日本の盆船・精霊船もそうであるが、魂を舟に乗せて海の彼方に送るという習俗は、広く分布していたことがわかる。

図5 『北京風俗図譜』の焼船（内田編 1964）

5．おわりに

民族学者・岡正雄によれば、仏教渡来以前に日本島に居住した人々によって信じられていた宗教を包括して神道というならば、神道はまたいくつかの異系宗教形態の重層・混合体としてみられるという。神の出現を、（一）垂直的に表象するものと、（二）水平的に表象するものとの二つの形態がある。一般的に神道といわれるものも、このように少なくとも二つの宗教形態の重層・混合から成立しているのである（岡 1956:107-108）。

この水平的なものは、ヤマアテのような漁民の信仰に顕著である。つまり、山は海上における自らの位置を知るために重要なランドマークである（上田 1993:19）。このことが信仰の根源にはある。前述のごとく、空の彼方と海の彼方は、同一視されるものである。これは、西讃地方の島々の墓地が両墓制という古い慣習を留めながらも、なぜかその霊魂は弥谷山という対岸の山へと行くと信じられるようになったのかを考えるうえでヒントとなる。瀬戸内を航海するうえで山は安全に航海するための指標と同時に、信仰の対象であった。そのような民間信仰や墓制が仏教と融合し、イヤダニマイリのような形態となったのではなかろうか。

これら島々でも風葬が行われていた可能性が本当にあるならば、沖縄と同様に死者を身近に感じすぐそばに他界があると信じていたとは考えられないだろうか。風葬や洞窟葬が日本各地でも行われていた痕跡は認められる。ここでの他界観は類似していてもおかしくはないだろう。

その後、仏教や他の系統の文化と混在することにより、他界とは遠いものとなってしまった。このようないくつかの他界観や文化系統の存在を想定する上で、考古資料や民俗資料、そして万葉集にみられる葬送や他界観は極めて重要な資源である。

謝辞　本稿執筆に際し、後藤明先生をはじめ、共同研究メンバー各位からご指導・ご教示を賜った。また、山田仁史先生・何彬先生・稲田道彦先生より文献などのご教示を、シンポジュウム会場にて石野博信先生から示唆的なご意見をいただいた。いただいたご意見・ご教示を充分に活かせていない部分もあると考えられるが、その責任は全て筆者にある。記して感謝とともにお詫び申し上げる。

【註】

1） 舟葬については、戦前からその有無について議論がなされてきた。しかし大寺山洞穴遺跡までは、その存在について懐疑的な意見が優勢であった(磯部 1983、磯部 1989、岡本 2000など)。

【引用・参考文献】

麻生　優・河原純之・岡本東三 1997「館山市大寺山洞穴遺跡の舟葬墓」『考古学ジャーナル』421 ニューサイエンス社 pp.29-34
伊東信雄 1935「日本上代舟葬説への疑問」『考古学雑誌』25-12 日本考古学会 pp.67-72
石崎善久 2001「舟底状木棺考」『京都府埋蔵文化財論集』4 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.67-78
磯部武男 1983「古代日本の舟葬について(上)」『信濃』35-2 信濃史学会 pp.29-45
磯部武男 1989「舟葬考」『年報・紀要』1 藤枝市郷土博物館 pp.51-70
稲田道彦 2010『瀬戸内の両墓制を訪ねる旅』 香川大学瀬戸内圏研究センター
上田　篤 1993『海浜の聖地』 新潮社
上田正昭 1970「葬送儀礼と他界観念」『国文学 解釈と鑑賞』1970-7 至文堂 pp.111-116
内田道夫編 1964『北京風俗図譜』1 平凡社
及川智早 2003「墓と他界観の民俗」『万葉民俗学を学ぶ人のために』 世界思想社 pp.205-223
大林太良 1977『葬制の起源』 角川書店
岡　正雄 1956「日本民族文化の形成」『図説日本文化史大系』1 小学館pp.106-116 (1979『異人その他：日本民族=文化の源流と日本国家の形成』言叢社に再録)
岡本東三 2000「舟葬説再論」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』 東京堂出版 pp.427-464
岡本東三 2006「海上他界観と海食洞穴墓」『季刊考古学』96 雄山閣 pp.86-90
折口信夫 1929「常世及び「まれびと」」『民族』4-2 岡書院 pp.1-62
菊地義裕 1993「死の諸相」『万葉集の民俗学』おうふう pp.217-225
後藤守一 1935a「西都原発掘の埴輪舟(其一)」『考古学雑誌』25-8 日本考古学会 pp.17-38
後藤守一 1935b「西都原発掘の埴輪舟(其二)」『考古学雑誌』25-9 日本考古学会 pp.1-22
小林行雄 1976『古墳文化論考』 平凡社
五来重 1988『石の宗教』 角川書店
櫻井　満 1995『万葉集の民俗学的研究』 おうふう
新里貴之 2011「鹿児島県徳之島トマチン遺跡」『考古学研究』57-4 考古学研究会 pp.122-124
武田　明 1971『日本の民俗 香川』 第一法規
多田厚子 2004「イヤダニマイリの変容」『御影史学論集』29 御影史学研究会 pp.41-56
辰巳和弘 1999「舟葬再論」『同志社大学考古学シリーズⅦ 考古学に学ぶ』 同志社大学考古学シリーズ刊行会 pp.267-278
辰巳和弘 2009「平手町遺跡出土の舟形木棺が語るもの」『平手町遺跡』 名古屋市健康福祉局 pp.62-69
辰巳和弘 2011『他界へ翔る船：「黄泉の国」の考古学』 新泉社
立平進 1996『神々と人のふれあい』 長崎県労働金庫
谷川健一 1983「古代人の宇宙創造」『太陽と月：古代人の宇宙観と死生観』 小学館 pp.5-50
辻尾榮市2010「舟・船棺起源と舟・船棺葬送に見る刳舟」『人文学論集』28 大阪府立大学人文学会 pp.125-161
鶴見良行 1994『マングローブの沼地で』 朝日新聞社
鄭家瑜 2007「『古事記』における黄泉国説話の成立をめぐって」『明道日本語教育』1 明道管理学院pp.121-136
徳富重成 1979「徳之島の岩屋葬」『葬送墓制研究集成』1 名著出版 pp.180-190
中山太郎 1962『万葉集の民俗学的研究』 校倉書房
外間守善 1999『海を渡る神々―死と再生の原郷信仰』 角川書店
堀　一郎 1953「万葉集にあらわれた葬制と他界観、霊魂観について」『万葉集大成』8 平凡社 pp.29-57
丸山顕徳 1983『沖縄の民話と他界観』 海鳴社

八幡一郎 1943『南洋文化雑考』 青年書房昭光社
山田敏夫 1973「古代人の他界観(1)」『びぞん通信26 美術文化史研究会 pp.6-11
山田敏夫 1974「古代人の他界観(2)」『びぞん通信31 美術文化史研究会 pp.7-13